１３０期の生徒諸君へ

校長　久保田範夫

君たちは、安積が１３０周年を迎える年に入学しました。巡り合わせとは言え、記念すべき大きな節目の年に入学した君たちは、そのことを大きな誇りにして良いのではと考えます。その式典で私は、歌人与謝野晶子の

劫初よりつくり営む殿堂に

われも黄金の釘一つ打つ

を紹介しました。そして、「本校１期生高山樗牛の時代から、現在の１年生である１３０期生に繋がる安積の生徒たちが営々と築き上げてきた大きな殿堂が安積高校である、と捉えています。気宇壮大な与謝野女史の足元には及ばなくとも、安積という殿堂に集う私たち教職員・生徒が、一人ひとり持っている釘をしっかりと打ち込み、この殿堂をより高く、より大きくしていきたいと考えております。その釘は、プラチナかも知れないし、或いは鉄や木製のものもあるかも知れませんが、この殿堂のどこかに打ち込む場所が、釘がぴったりと収まる場所が必ずあるはずです。仮に、在学中にうまく釘を打ち込むことができなかったとしても、大震災の経験をしっかり踏まえて、生涯に亘って知性を磨き続けることによって、安積という殿堂を確固たるものとすることができるはず」であると述べました。安積という殿堂（るつぼ）は、総合的な人間力を大きく成長させる坩堝でもあります。その中身は、ハイレベルな学力＋クラス・部活動等の様々な個性を持つ友人＋個性豊かな教師＋各界で活躍するＯＢ・ＯＧ＋１３０年の歴史の重みであり、安積の坩堝で、より多くの文章・友人・教師に触れ、より多くの考え方に触れること、それが総合的人間力のアップに直結します。そして、進学したい大学への思いが強ければ強いほど、合格可能性は高まります。１年後、志望大学のキャンパスを友人（恋人でも良い）と歩いている自分自身をイメージして最後の坂を登り切ろう。